

週刊ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成18年4月10日号

「コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コシヨウの暗黒物語」

ジャン＝ピエール・ボリス(著)

林昌宏(訳)

作品社 2005年11月10日刊

バレンタインデーのチョコレートの山、いい香りを立てているカフェ、高級フランス料理に用いられるコシヨウや岩塩、とびきり生きのいい伊勢エビ、口に入れるととろけそうなマグロのトロ。われわれはグローバリゼーションの恩恵を受けて世界中から高級食材を輸入している。ではこれらの一次産品はどのようにして生産され、どのように届けられているのだろうか。われわれの払った代金は誰の収入になっているのだろうか。

著者はジャーナリストとしてフランスを始め、アジア、アフリカなどの報道に携わってきた人で、本書は著者がフランスの国営放送ラジオ・フランス・インターナショナルで「一次産品の市場動向」という番組を7年間続け、世界中の関係者を取材してきた成果をまとめたものである。

本書のテーマはグローバリゼーションの陰の部分である。世銀やIMFが推進した市場自由化、規制緩和の流れの中で、生産者協定が弱体化され、国際商品価格が崩壊し、生産者である農民だけが極度の貧困に陥った経緯が詳しく描かれている。

これはグローバリゼーションの問題なのだろうか。アマーティア・センは『人間の安全保障』（集英社新書）の中で、グローバル化自体が問題なのではなく、グローバル化がもたらす利益の配分の仕方に問題があるのだと論じている。たしかに、先進国の貿易商社や製造業者は農産物の価格変動や天候リスクに対して、金融派生商品を購入するなどして、危険回避を行っているが、農民には、様々なリスクを回避するための手だてもなければ、金融派生商品を購入する金もない。これではリスクが一方的に農民に転嫁され、貧困が増幅されていくのは避けようがない。この仕組みを変えることなく、直接買い付けによって生産者に最低保証価格が国際市場相場価格に関わりなく支払われる制度である流行のフェア・トレードを導入しても焼け石に水だということで、著者はフェア・トレードの有効性に対しては懐疑的である。

本書はグローバリゼーションの多面性を見つめ直すいい機会を提供してくれる。